
オモイデのアルバム…

藤野蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイデのアルバム：

【Nコード】

N3989C

【作者名】

藤野蒼

【あらすじ】

至って真面目な男子、秀太は引っ越して今までと違う町に。そこで出会う、大切な仲間。：想い人。しかし、付き合うには少しハードルが。彼女はガッツリメイクのギャルでした。

第一章…デアイ

ふと、掃除をしていた手を止めた。

あの、アルバムが見つかったからだ。

ずっとずっと、遠くに思える、あの日々の記録が…

朝、俺はいつものように制服に着替えた。

しかし、今日の俺はひと味違う。制服が今までとは全く違った。

今までのガ克蘭からは想像もつかないような、さわやかな紺のブレザー。胸に光る校章。深緑のズボン。

すべてが新鮮だ。

着替えが一通り終わると、下の階に降りた。

そう、今日は高校の入学式。しかも、俺は引っ越してきた。

つまり、知らない地に来た異邦人。知ってる者は一人だっていない。ふつうだったら不安なのかもしれない。だが、俺はどきどきしていた。楽しみで楽しみで仕方がない。

どんな友達が出来るんだろう。どんな奴らがいるんだろう。

そういう気分ではなかった。高校からだし、途中からじゃないから不安じゃなかったのかもしれない。

下に降りて洗面所にいった。

鏡の前で髪をセットする。とは言ったものの、俺の場合はワックスで髪を立てるわけでもなかった。

くしでとかして寝癖を直す。それでも俺の髪は癖っ毛で、ヒドイはねはなかなか直らない。

仕方なく、黒く目立たないピンではねている前髪を止めた。

柔らかく茶色がかった髪は、今日は見事にはねていた。

こんな日にこんなにひどくはねなくたっていいじゃないか。

文句を言いつつリビングへ向かった。

リビングへ行くともうすでに父はいなく、妹の穂波がテーブルに座ってパンをかじっていた。

「おはよう、お兄ちゃん」

「うん、おはよ」

軽く挨拶を交わして席に着いた。

母は台所から現れて目玉焼きをテーブルに置きながら俺に向かって言った。

「あら、秀。おはよう。今日は大丈夫そうかしら？ 思っていた高校に行けなくて残念ね。もう、なんのために私立のエスカレーター式の学校に入ってたのかしら」

朝からその話？ 俺はうんざりしていた。そもそもそう思ってたんなら父さんを単身赴任でもさせたらどうなんだ。わざわざ家族みんなで引っ越さなきゃ良いじゃないか。

「ああ、でもここでも気を抜いてはだめよ？ 貴方には出来るんですからね、常にトップを…秀、聞いているの？」

「聞いてますよ。そろそろ行きますね、入学式に遅れるなんてもつてのほかですから」

俺は思いつきり嫌な顔をして席を立った。

「穂波、今日兄ちゃん早く帰るからな。一緒に遊ぼう」

穂波の頭を軽くたたいて言った。

「ほんとう？ わかった、待ってるね」

穂波は嬉しそうに言った。

「いけません、秀、貴方は今日から新しい塾へ行くのよ。分かってるわよね？」

「いいじゃないですか、今日くらい。穂波にも遊ぶ時間を上げて下さい！」

「穂波にはあげているわ。この子はピアノが上手よ。勉強よりもそっちを頑張って欲しいわ。…でも、貴方は違うのよ？ 勉強してなさ

い。トップに立てるのよ」

なんだよそれ。俺には勉強しかできない、みたいな言い方は…。

「ちょっと、秀!？」

「そうですね。もう行きます。さようなら」

俺はリビングの扉を思い切り閉じた。

全く、冗談じゃない。穂波にまでそういった教育を？俺だけで十分だっていうのに。

それに俺のために穂波にまで迷惑はかけてやりたくないし、遊ばせてあげたい。

せっかくの新しい1日というのに、朝から気分が悪い。

ブツブツ言いながら歩いているとわりとすぐに学校にたどり着いた。新入生と思われる制服が新しい生徒が多く学校に入っていた。

そのまま俺も吸い込まれていく生徒たちに混じった。

クラス割表が配られてそれをもとに体育館へ行く。どうせ知っている奴はいないので一人でさっさと行って指定された席に着いた。

周りはざわざわしていてみんな友達というようだった。浮いているのは俺一人のようだ。

おとなしく座っているといきなり肩をたたかれた。

「こんにちは！俺、席となりなんよ。仲良うしてや」

「…か、関西弁だ…」

「せや、俺去年越してきてな、あんまし友達おらんねん。俺俊平や。そっちは？」

「あ、俺？俺秀太。俺最近引越してきた。何週間か前」
俺がそういうと、俊平は驚いたようにいった。

「ほんまかいな。じゃ、なおさら仲良くせないかな！改めてよろしく」

俊平は手を出してきた。俺は俊平の手を握り返した。

「しっかしまあ、はねてんな」

「あ、髪の話？半分癪毛で半分寝癪。困ってんだよ」

「まじ？ストパーとかかければええんやない？俺かけてん」

そうは言われたものの、俊平の髪はワックスで少し立てていて前髪もサラサラ。とても癪毛には見えない。

「え、俊平癪毛？」

「うん。秀太と同じなんよ。とれてくると困るんやけど」
俊平はくにとやりと笑った。

そこで先生から指示が出た。時間だから席に着けと。もともと座っていた秀太たちには関係なかったが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3989c/>

オモイデのアルバム…

2010年10月26日05時30分発行